

第12回 解答例 「教育、大学、文学、ドラマ、日常－教育社会学的考察」の感想

課題 武内清「教育、大学、文学、ドラマ、日常－教育社会学的考察」(2022.9)の感想を書いて下さい。(手元に冊子のない方は、私のHP (<https://www.takeuchikiyoshi.com>)の2022年11月13日)でも読むことができます。感想は、その冊子の項目のどれか1つでも、複数でも冊子全体についてでも構いません。全体はI～Xの10の章からなっています。この冊子は、教育や学校だけでなく、教育の周辺のいろいろなテーマに関して、教育社会学的ないし社会学的な考察を加えています。教育社会学や社会学の見方を少しでも理解していただければと思います。

解答例

A

【II-8~11について】—今回のこの部分を読み私は、コロナ禍を過ごした学生には、学生時代コロナ禍を経験していない学生に比べ精神面で勝るのではないかと考えた。コロナ禍に入り、当時私は高校生だった。zoomを利用しての遠隔授業は無かったが、大学でいうオンデマンド授業のLINEの、オープンチャット機能を利用して授業が行われた。学校と同じ時間に起床報告や課題の提示、連絡事項が行われ、比較的規則正しい生活はできていた。コロナ禍により課題に取り組む必然性があることにより、コロナ禍前以上に真剣に取り組んでいたと思う。それは大学とも同じことがいえ、授業資料にあるように「授業や課題に対して意欲的に取り組んだ学生」の割合が高く、意欲的に取り組むことができているのだと感じた。少し話はズレるが、コロナ禍の高校の授業形式と大学の授業は似ているのではないかと感じた。高校の授業はどちらかというところを出されたものをしっかりとこなす学習に対して強制力の強いものとされるが、コロナ禍の授業になるにつれ、「宿題型」といった自主的なものが増えた。そして大学の授業は履修も含めて全て自分でこなさなければならぬため、「自ら」という部分で類似していると考えた。そう考えると大学をコロナ禍で過ごすと考えたと「自ら」という部分がより強調され、委ねる部分が減り、精神的にも辛かったのではないかと考える。オンデマンドまたはオンライン授業に変わった分、普段聞いているだけ、出席するだけの授業にも課題が課され正直私は学ぶことにフォーカスが当てられているのではなく、こなすことにだけフォーカスが当たってしまっているのではないかと考えた。しかし授業資料にあるように遠隔授業になると通勤時間、友人との私語、無駄話等がなく学生は授業や課題の内容に集中できる。また学生たちの勉強時間も増加する。このように本業である学業においてはメリットがたくさんある。その代わり交友関係といった人との関わりが減り、大学生にしかできない自由な時間が1人(自分自身)に制限されてしまう。私は大学生とは学びながら、やりたいことをたくさんするといった両立が大事だと考えている。その時間がなかったと考えると非常に辛かったと感じた。また私は一人暮らしのため家族との時間もなく、コミュニケーションの低下は発生していたのではないかと感じる。その忍耐力(精神力)

ほどの学生よりも強いと考えた。今後もまたこのような事態になる可能性は十分にあると思う。自我との戦いになってくるためこのコロナ禍でつけた精神力をどう利用するかで変わってくるのではないか。

B

II-8, 9 オンライン授業の展開と活用について—大学に入る前からコロナ渦を経験してきている私にとってオンライン授業というのは初めてというわけではなかった。しかし、大学に入学してすぐはほとんどの講義が対面で行う事ができず、同級生と交流が行えなかったという点では、対面に切り替わった際に不安が残るといった問題もあった。また、基本的にオンライン授業では、動画を視聴し、課題を提出する方式で、どの講義も同じような内容であったため、資料にも書かれている通り、手抜きのように感じてしまったり、やる気があまり出なかった。しかし、対面に切り替わった現状、講義中にスマホをいじったり、寝ていたり、授業態度に影響してくる学生の姿を多く見ていると、オンラインの方が、自分のペース、環境で講義を受けられるといったメリットもある。

他にも、大学へ行かずとも、遠隔で講義を受けられるという事は、体調が悪かったり、ケガをしていて通学が困難な状態でも、講義を出席できるという活用方法もあると考えている。

特に、武内教授の教育社会学のように、講義の期限が大学の最終日にあらかじめ設定されており、ある程度期限に猶予があるタイプの方が、学生の私にとっては、やりやすいし、他の課題の進捗度と合わせながら進めることができるので、非常にありがたい。対して、一週間が期限で、毎週更新していくタイプの講義だと、どうしてもやるのを忘れていたり、期限が過ぎると課題が行えないため、継続して行えないと苦勞するし、溜めることもできないので、オンライン授業の際は、学生のニーズに合わせたスタイルにさせていただくと学生のモチベーション向上にも繋がると考える。

C

私はII章「大学、大学教員、学生」を読みました。その中でも、1、5、16が面白いと思いました。1は発表の時に追加でポイントを挙げることに對しての認識の違いについて。5は授業の最初に教員の意向や意気込みを話しておくこと、自分に対していい授業を行うことを科すことによって、ほとんど私語がなくなったというお話。16は今のデジタル化が進んだ時代において紙媒体の本が必要なのかというお話でした。特に16の大学教員と本にすごく共感しました。デジタルで本を読める時代に、紙の本として残しておく必要があるのかということについて筆者は本のない生活は考えられないと答えていました。本の題を見ただけでストーリーや読んだ時の心情が浮かぶというのがとても共感できましたし、自然や景色も本に囲まれている部屋を超えることはできないという言い回しが素敵だなと思いました。

D

Ⅲ章 学校教育について一学校の社会的特性として規則に従う＝法律に従う、退屈な授業に耐える＝仕事に耐えるといった態度を養うことも学校では知らず知らずのうちに学んでいるとあったが、このような学校の雰囲気や仕組みでは児童の学校離れが加速するだろうと感じる。

何回目かの課題に、ホームスクーリングや学校と塾の違いについて考えた講義があったが、現代は学校だけが学びの場なのではなく選択肢が増えてきたことがわかる。

また、主にコロナが流行ったことで見直された「様々なことに対する効率の良さ」を考える人が増えたり、多様性を認め合っていこうという社会の風潮があったりと人々が求めることが多様化しそして省エネ化しているとも感じられる。

だからこそ学校だから出来ることやまたその良について見直し、学びの場としての質の向上を含めて充実させていかなければならないことがⅢを読み、感じ取る。

AI が進化したためそれに任せる場面が増え、人間だから出来ることを見つけ出さなければならなくなった。

そこで強みになるのが専門性だと私は考える。Ⅲの2・3・4・5に書かれているアクティブラーニングが興味深かった。そこには「知識は個人の中での蓄積だけでよいのではない。他者や社会と関わり、影響を及ぼすもの」と書かれてあり、視野や学びを深めるには個人力だけでは難しいところがあるとわかる。

学んだことを振り返って改めて考え直したり、他者の意見を聞いたりすることによって思考の柔軟性が高まるのだろう。それは私自身も経験をした。学びのジャンルが「国数英理社」に限らなくなり、他者との意見交換の場が授業内に多く組み込まれている大学から学習が楽しい・面白い・深まったと感じられるようになった。こういった感覚が「主体的対話的で深い学び」を自主的に行いたいと思えるきっかけにもつながると感じる。

小・中・高校での授業の形態も多様化して、自身にとって興味のあることや学びたいことを極めることができ、学べるものの選択肢も増やせたら良いのにと感じる。しかしこの理想の実現の難しさも感じる。

E

Ⅲ-学校教育― 私は、この章を読んだ中で特に「アクティブ・ラーニング」の重要性について着目した。どの講義の中でも、今の教育界ではアクティブ・ラーニングを取り入れた授業が中心になっているということを学び、模擬授業などに積極的に活かしている。

しかし、「5.アクティブ・ラーニング批判」を読み、授業内で教師の役割が失われていたり、取り組むべきことの優先順位が間違っていたりと、行き過ぎたアクティブ・ラーニングの事案を知った。

教師の一方的な授業形式ではなく、学習者が能動的に授業へ参加することは、資質能力を育成するだけでなく学力向上に大きく繋がるため、とても重要なことだと考える。

そのため、アクティブ・ラーニングのメリットが適切に発揮されるよう、教師は、学習者が自ら学び、考えられるような発問や授業の工夫が必要であると考えた。

F

私はⅢ-17 で日経新聞の記事の見出しが「学校パソコン、もう返したい」であることにとても共感した。

教育のデジタル化によって児童が楽しく興味を持って学べたり、簡単に復習できたり、静止画ではなく動画を見せることによって理解を深められたりとメリットも多くあると思う。しかし、デメリットの方が多いと私は思う。視力が下がる・記憶が定着しにくい・授業中の内職や授業に関係ないことを閲覧する・独りで過ごす時間が増えるなど、パソコンに集中しすぎてしまう点である。一方で教科書やノートを使用すればクラス全員が同じタイミングで同じことをするため、学びに置いていかれないよう一人一人が集中して授業に臨むような気がする。また、自分自身パソコンにメモを取るよりもノートに書く作業をすることで記憶が定着される。

したがって、教育のデジタル化が推進されているが無理に取り入れようとせず、使用する場面と使用しない場面の切り替えをはっきりとし、使用した方がメリットが大きいと考えられる時に使用すべきだと考えた。

G

私は初めの教育社会学という項目を読み、伝統的な教育方法・教育学のように「こうあるべき」という考えをなくしていかなければならないと考えた。人は周りの人に行動や思考を合わせがちだと考える。周りが今までこうしていたから「こうあるべき」というような考えである場合、それ以上よいものを作り出せないと考えた。教育現場もこれからの児童により良い教育をするために伝統的な教育を客観的にみて「こうあるべき」という考えを改善していかなければならないと考えた。教育を通して児童を成長させるため、教育社会学を教員が学ぶことで今後の社会を変えていくのではないかと考えた。

H

この冊子のⅠ-2について感想を述べる。Ⅰでは主に教育社会学とは何かどのような学問なのかについて取り上げられており、その中でも目についたのが2の新興の学問としての教育社会学である。自分は教育社会学を学ぶ前までは社会科の授業の延長戦になるものかと考えていたが、今までの授業や2を読んで考えが変わった。教育社会学というものは社会学とも呼べるものであるが、社会学だけではない理由が研究対象の教育に特質があるからだ。この教育社会学というのは実践的な教育を対象にするためにその教育が社会学を基盤とするもの。このような学問は今まで触れ来ることがなく、どのような学問なのか、どのような授業を行えばよいのかなど多くの不安と疑問があったが、今回のⅠ-2を読んでい

くうちに教育社会学について少し理解できたと思うと同時に今まで習ってきたもので教育社会学というものの特質を理解できたのではないかと感じた。

I

<IV 社会学・社会心理学> - 7・8・11 を読んで -

私はこの資料を読んで、人の心や気持ちを読み取り、行動することの大切さや難しさを感じた。自分が相手のことを思って行動したことで、相手にとってそれが良い事とは限らないし、相手の求めることとは違うこともあるためである。

例えば、11 の自虐的な発言に対するリアクションについての例でもあるように、相手が発する言葉の意味が、必ずしもその通りの意味であるとは限らない。「大丈夫と発言していても、本当は大丈夫ではない」「行けたら行くという発言をするときは全く乗り気でない」等、発言と本心が異なる場面は日常で多く存在すると思う。このような本心を正確に読み取り、相手の求める言動を行うことは至難の業であり、苦手意識を持つこともあるだろう。

しかし難しいからといって、相手のことを考えることや、思いやることを疎かにしてはいけない。意味や気持ちが分かるという力は人間特有のものであり、AI や様々な技術が発達する社会で、今後人間に求められる重要な力であるということを、以前読んだ本で学んだためである。このような、いわゆる“読解力”が低下しているという現在の状況を改善し、意味や気持ちを適切に読み取れるようにならなければ、人間はAI や最新技術に劣る存在になってしまうかもしれない。

特に私が目指す教師という仕事は、児童や保護者、同僚など、人を相手にする仕事であるため、人の心や気持ちを読むことができなくてははいけない。そのためにはやはり、相手にする人1人1人と丁寧に関わり、その人よく知り、変化にも気付けるようにする必要があると私は考える。相手を知ろうとする気持ちを強く持ちながら、人と関わっていきたい。そして自分の思いやりが、有難迷惑となってしまうことがないようにしたい。

J

小説やドラマから教育を自分なりに考えてみたいと思う。本書のように詳しいものは出さず全体的なことを書きたいと思う。小説やドラマは好きでどんどんと次の話へと自ら進んでいくと思う。次が気になるから、この話が好きだからと理由が大きいと思う。教育で考えた時に、この考えを教師は子どもに持たせる方ができたらすばらしいことだと思う。子どもが自分から進んで学習をして、その理由がこの先を知りたいから、勉強が好きだからとなればとてもすごいことである。そのためにはまず小説やドラマと同じように楽しいというところから入らなければだめになってしまう。楽しいから入ることで先に進みやすくなる。そのためいかに最初を気にするかが必要となってくる。導入で楽しませることができれば、その1時間、1時間を楽しませることができると考える。教師はいかに勉強を楽しませることが大事かが小説やドラマから分かったと今回読んで感じる事ができた。

K

「VI.日常生活の社会学」

1.スピーチについてー 私はスピーチをする時は相手の目を見て、身振り手振りを交えながら声に抑揚を付けることが大切だと考えている。ただ原稿を淡々と読み上げるよりも、聴者の印象に残りやすく効果的だと思うからだ。しかし、何も用意が無いと頭が真っ白になった際に、スピーチ自体が成り立たなくなってしまう。ではどうしたら良いのか。端的に話すべきことをメモしておくことが効果的だと考える。〇〇について話すのであれば、〇〇とメモに起こしておく。単語を見ることで一度落ち着いて考えたり、話すべきことを思い出したりできる。また、ヒートアップして話が逸れてしまった時の軌道修正も行えるため、メモを軽く見て一度考えることはとても大切なことだと思う。その際、原稿にしてしまうと逆に見づらくなって混乱したり目線をずっと原稿に向けてしまうため、単語だけメモに起こすという所が重要である。

したがって、簡単なメモ程度であれば用意することは大切だと考えるが、原稿については必要ないと考える。

3.人との距離の取り方についてー私の場合は、初対面の相手に対しては敬語など丁寧な言葉遣いをしたり、こちらから不用意に話しかけないようにしたりして、ある程度の距離を置くようにしている。理由としては、初対面で馴れ馴れしいと思われることを危惧しているからだ。相手が自分を傷つけることよりも、自分が相手を無自覚に傷つけてしまうことがないかに私は重点を置いている。相手を傷つけることなく上手く立ち回っていれば、おのずと相手から距離を縮めてくれることもあるだろう。あくまで受け身で私自身は行動している。自分から新たな出会いを得る機会を不意にしてしまっているとも取れるが、それ以上に相手を傷つけないことの方が重要だと考えるため、私はこの姿勢を貫いていきたい。

L

私はVI日常生活の社会学の章を読んだ。この章から主に2つのことを考えることができた。

1つ目は、私自身も心の安定を保つために何かと準備してしまうが、新しいことをするときには挑戦する姿勢が大切だということである。1のスピーチについてから、私は人前にでると緊張して何を話したらいいのか分からなくなってしまうため、原稿を予め用意するのだが、ユーモアのあるスピーチとはその場にあった話題を出すことで完成されるように感じている。このためには、13の狩猟についてにあったように、その場の全体の状況を把握して行動することが必要になってくると思う。準備することも大事であるが、ゆとりを持たせることによって、イレギュラーなことが起きても上手く対応できるようになると思うので、身につけていきたいと思った。

2つ目は、現代における人との距離感についてである。私は昔よりも距離は遠くなってい

と思う。理由は、ネットの進化だと冊子からも読み取ることができた。ネットを使用すると、実際に人と関わることもなく、自分の趣味とあった人を探し出すことができ、気軽にあらゆることができるようになってきていると思う。そのため、あまり傷つかずに人と関わっているように思う。また、一人でドラマや映画を好きなだけ見たり、ゲームをしたりする時間を好む人が多いと思う。しかし、11 のフジロックのように実際の空気を感じることも大切だと思った。ネットと対面のメリット、デメリットを考えて行く必要があると思った。

M

今回は、VI章の日常生活の社会学を読んだ感想を書きたいと思います。

選んだ理由としては、教員にとって人との対面、コミュニケーションは重要と感じていてそのコミュニケーションがコロナのせいで変わったかもしれないと感じたからです。最初にスピーチについて、私もなにかスピーチをすることになったりとか、模擬授業などをするようになった際に原稿を作成した上で迎えることがほとんどになっています。理由も同様で「スムーズに進行しなかったらどうしよう」などの心配が勝ってしまうからです。その結果、最後までやりきることはできることはできましたが、自己の能力は上がっていないことはここ最近特に感じるようになりました。「伝える」より「読む」となってしまうことになっています。これは少しずつでも変えていかないといけないと思います。言葉の知識を増やすのはもちろんですが、それでは実践で上手いかなことを遅いですが強く痛感しました。まだ現在は練習の段階であることだと実感し、実践を繰り返し行うことをしなければいけないと感じます。失敗してもいいので自己の頭で考えてその状況に生じた発言をできるようにしていきたいです。

二つ目に人とのコミュニケーションについてです。人との距離感とありましたが、私はその距離感をつかむことが特に苦手であり、初対面の場合だとなおさらです。コロナの影響でコミュニケーションの距離感が更に難しくなるのではないかと思います。実際に双方の距離感の相違によって会話がかみ合わずに上手くいかなかった経験がたくさんあります。それを引きずってしまってコミュニケーションと向き合うことを自然と避けるようになってしまいました。ですがそのままではいけないと思うので少しずつでも変化させていきたいです。具体的には自分から話すことを中心とするのではなく、相手がたくさん話していきたいと思うような聞き上手を目指していきたいと思っています。話がうまい人は何に優れているのかを常に探っていき自分のものにできるようにしていきたいです。

N

VI-1 について一このスピーチの話を読んで私も似たような経験をしたのを思い出した。小学生の頃(明確に何年生の時かは覚えていないが)日直は 1 分間スピーチというものを朝の会に行う決まりがあった。スピーチの内容は特に決められている訳ではなく、それぞれ違った。私の場合は、日直になる 1 週間ほど前から 1 分間スピーチの内容を考え、家で原稿

を見ないで言えるまでに練習をしていた。完成度が高く、練習もたくさんしていたので自信があった。それとは反対にもう 1 人の日直の男の子はなんの原稿を見ずにスピーチを行っていた。当時の私は何で練習していないんだろう、よくないなと思っていたが不思議なことにクラスの子達は私のスピーチを聞いている時よりも男の子のスピーチを聞いている時の方が楽しそうで話に聞き入ってるのが分かった。クラスみんなが楽しそうなのはふざけて面白可笑しく話しているからだだろうと当時は考えていたがきっとそれは違うだろう。たしかに、逆の立場になったら原稿をそのまま読んでいるような話し方には魅力を感じず、話が入っては来ないだろう。だからと言って、何も準備せず挑むには少し怖い。そのため、大まかな流れや大体の話を頭に入れておき、話すことで聞き手の興味をひくことはもちろん、自分も安心して話すことに繋がると思う。同じトピックのスピーチをしても、毎回毎回違う言葉で伝えることが出来る人こそが話上手なのかもしれないとこの文章を読んで考えた。

O

『II-6 オチやボケのある授業—関西と関東の大学の違い』を読んで、前の方がユーモアある展開で後の先生が困惑したという文章があったが、私も似たような経験をしたことがある。クラスの前で一人ずつ 2～3 分の発表をする時だ。私の前がクラスの中の面白い人で、真面目な内容なのに人を惹きつける話し方で雰囲気盛り上がっていた。一方、そのような性格ではない私の発表をするときは空気が悪いほうに行ってしまったような気がした。このような経験をして、将来の夢が人前で話すことが多い教員であることから、人前で話すときはわかりやすく、人を引き付けるような話し方をしていきたいと思う。

関西の話文化のすごさは私も共感する。関西人が映っているテレビや YouTube を見ると何気ない会話でも面白く尚且つわかりやすい。一般人のドッキリ企画を見ると関西はリアクションが大きい、関東はリアクションが少し薄い印象を持つ。関東人は、人前に立つことや目立つことが苦手と考えることもできるだろう。関東は～、関西は～と分けて考えるのはお互いにあまり良い気分にならないと思うが、なぜこんなに差が生じているのかがとても気になった。

P

今回は、初回の授業の際に受け取った「教育、大学、文学、ドラマ、日常—教育社会学的考察—」という本についてレポートをする内容であった。正直、この課題に取り組むまではこの本を読む機会がなかったため、新鮮な気持ちで本に触れることができた。

この本では、冒頭のように社会学の授業に役立つだけでなく、武内氏の社会学の考察の一部を提示することや武内氏の生きた過程(自分史)を語る内容となっていた。1～10 章にわたるかなり細かく別れたテーマが展開されており、どれも魅力的な内容であり、楽しく読むことができたが、その中でも最も興味を惹かれたのが「8 章(韓国ドラマ、映画)」の内容である。

それまでの章は大学のことや日常など、私たちの身近な部分について触れた内容もあったが、どれも教育や社会学に関連付けた内容となっていた。そのため、本章も韓国ドラマや映画を教育や社会学に関連付けた内容になっているのだと想像していた。しかし、このⅧ章(韓国ドラマ、映画)は学習的考察などが特に書かれておらず、武内氏の韓国ドラマについての意見やネットに出ている感想のみが綴られている内容となっていた。私はこの衝撃的な内容に驚きを隠せなかった。普段は教育についての議題を資料を元に考察したり、自分なりの意見でまとめるといった学習的内容が多い中、武内氏の韓国ドラマに対する愛、そして韓国ドラマを通して現代韓国における恋愛観や社会観の考察といった私的内容のみで構成されていて、非常に読んでいて興味深い内容であった。

私自身、これまで韓国ドラマや韓流の芸能人等に全くの興味がなかった。もちろん JAPAN のテレビが好きという理由もあるが、韓国ドラマという文化の違うものに対しての毛嫌いもあってかあまり関わらないようにしていた。しかし、授業教材の一部、そして章の1つとして武内氏の韓国ドラマに対する情熱的な愛情を語られたことにより、少し興味が惹かれた。また、日本の文化とは違った視点での考え方や生活様式などを知り、比較教育にも活かすためにも韓国ドラマを少し見てみようと考えた。

今回は武内氏の韓国ドラマ、映画といった社会学とは直接的に関係は無い内容について考察していったが、その中で文化の違いを考察することで比較教育に繋がるなど、教育の身近さや教育の幅の広さを実感することができた。これからも身近な部分から教育について考える意識を高めたい。

Q

私は、Ⅷ章の「韓国ドラマ、映画」について読んだ。なぜこの章を選んだのかというと、私も高校時代のコロナ時期に「韓国ドラマ」にはまっていたので、これを日本と韓国の比較教育として捉えられている考え方に興味を持ったからである。資料を読むと、韓国の特徴として「結婚には親の許可が絶対必要」「家族の繋がりが強い」「学歴社会」「旧ジェンダー意識」「刑が重い」などが挙げられている。韓国ドラマではこのような韓国の背景があるからこそ韓国側の視点から見ているから日本人は違う視点から見たドラマに興味を持つのだと考えた。日本ドラマは「少女漫画」が人気である背景から日本にしかない「きらきら言葉」などが用いられる映画が多いイメージがある。このようにその国の心境の特徴は違うからこそ世界独自の違った物語が生まれると感じた。これは時代ごとにも変わるのではないか。例えば、今はネットによる恋愛や生徒と教師の恋愛など現代の時代の恋愛の特徴を捉えた映画が多い傾向にあると考えた。歌手も現代はボカロや切ない曲が流行っているのも若者の心情を表して共感を持つ人が多いからだし、現代の音楽で不協和音を題材とした曲が多く作られているのも聞きなれている昔のオーケストラではない新しい曲に興味を持つからではないかと感じた。これらの点から、芸術の分野で評価されるのが時代によって変わるのは、その時代に生きている人の傾向の変化によって評価されるものも変わるのではないか

と考えた。私がお勧めしたい韓国ドラマは「あやしいパートナー」である。これは、先生の紹介された「マイ・ディア・ミスター」に書かれているのと同じように最初は弁護士や検事に関わる内容で恋愛に関わる内容ではなかったため早い回でみるのをやめてしまう人が多いが、このドラマは最初の内容を見ることによって見るのが楽しくなる物語である。海外の特徴は調べるのではなく、日々の日常からも捉えることができる。こういった事例を将来生徒に伝授していきたいと感じた。

R

私は、Ⅷ(韓国ドラマ・映画)を読みました。選んだ理由は、最近韓国ドラマを親が見ている影響で自分も見erようになったからです。資料の中であげられた作品の中で私が見たことがあった韓国ドラマは、梨泰院クラスだけでした。先生の書いてある内容を読んで、ただの韓国ドラマをここまで細かく見ていることに驚きました。特に、人間の4類型というので主人公のパク・セロイや敵役を判断していたことです。パク・セロイは信念・仲間のA型タイプ、ドラマを見た時の記憶を思い返してみると、学生の頃からお店を出した時も信念を曲げず、どんな困難にも立ち向かっていし、仲間を見捨てることなどはなかったと思います。敵役は損得と利己的行動のD型タイプ、まさにその通りでした。利益のためならどんな手を使ってでも、パク・セロイを潰そうとしていたのは今でも覚えています。胸糞悪い場面がいくつもありました。それでも、パク・セロイが負けずに立ち向かっていく姿には感動しました。ストーリー性やバックの音楽、主演者たちの演技力など探せば探すほどドラマひとつに対するクオリティが高いんだなと思いました。先生の書いた内容を見て、もう一度梨、泰院クラスを見直してみようと思いました。

S

Ⅷ章(韓国ドラマ・映画)―この章の中で、12個の韓国ドラマ・映画についての武内先生の感想が記述されている。この感想を読み、私も再び韓国ドラマがみたくなり、テレビの前に移動した。

今回、私が見た韓国ドラマは『恋するジェネレーション』という学園ものの作品である。そのドラマでは、子どもの成績順位が高い親だけが入れるグループが存在する。そのグループに入るには、子どもの成績が基準となる。成績が下がるとほかの親たちの視線が厳しくなったり、対応が変わったりしてしまうため、親は子どもに対してとても教育熱心である。このシーンから、子どものレベルがそのまま親の位置関係となってしまうのだと感じた。

日本では、いじめなど子どもだけの位置関係を表現するシーンがあるが、多くの韓国ドラマでは、子どもだけでなく親の位置関係を表現することがわかった。

また、私は韓国ドラマを通して、韓国は学歴社会ということを知り、若者に対して重りやプレッシャーを感じた。日本でも、学歴に関わる場面がいくつか存在するが、韓国と比べるとその度合いは低いと感じた。

海外のドラマや映画をみることで、その国の文化や特徴を知り、日本との違いを感じる事が出来るため、とても面白いし勉強になると感じた。

T

Ⅷ章（韓国ドラマ、映画）—私自身ネットフリックス、アマゾンプライムビデオで韓国ドラマを視聴することが趣味である。「梨泰院クラス」「愛の不時着」「パラサイト—半地下の家族」「恋のゴールドメダル」「社内お見合い」「わかっている」「恋するアプリ Love Alarm」など他にも多くの韓国ドラマを見た。恋愛、コメディ、ヒューマンドラマ、サスペンスなどを見て衝撃を受けることが多い。

武内先生のⅧ章を読んでとても共感した。私が考える韓国ドラマの魅力は、隣国の韓国の日常を味わうことができること。例えば食事の場面を見ると、食器の違いや食べ方の違いに気づくことができる。また、スケールが大きく見応えがある。そしてキャラクターに感情移入せずにはられない。

日本ではここ最近過激なシーンなどがあまりなかったり、モラルを守ろうとする姿勢が見られると感じる。日本の作品を批判するわけではないが、韓国ドラマのメッセージ性はすごい。韓国ドラマでは伝えたいものをしっかりと伝えようとするものがある。

例えば、私がハマるきっかけとなった韓国ドラマ「梨泰院クラス」では、パクセロイが復讐に取りつかれ父の仇に挑み下剋上を成し遂げるという物語。武内先生と同じように私も、パクセロイの強い信念に魅了された。社長の息子と社員の息子、対照的に描かれた二人の生活、苦しみなど感じ取ることができた。韓国が学歴社会ということを知り、これを冊子を読んで気づきこれからはもう一度見直して少し違う視点で見ようと思う。また、パクセロイの仲間、ヒョニがトランスジェンダーであることを公表するシーンは今の時代に投げかけているものだと感じた。性について世界全体がもっと考えるべきだと思った。

武内先生の冊子Ⅷの4「マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～」を読んでぜひ見ようと思った。人間関係、家族の形、人生、韓国と日本の違いを知れる作品とのことで興味がある。他国の作品を見たり、読んだり、体験したりすることは新しい発見につながる良い機会だと考えた。これからはもっと多くの作品を見て自分の知識、考え方、経験を増やしていきたいと思った。韓国にも行ってみたい。

U

私は、K-POP アイドルが好きなため、冊子の中の「Ⅷ章（韓国ドラマ、映画）」に興味を持った。冊子をすべて読んでみて、韓国ドラマでは『梨泰院クラス』『愛の不時着』の2作品、韓国映画では『私の頭の中の消しゴム』が特に気になった。

まず、『梨泰院クラス』と『愛の不時着』の2作品は、韓国ドラマの中でも世界中で話題になっている作品であり、元々私が見たいと思っていた作品だからである。役者の演技がリアルなため、自分が登場人物になった気持ちで見ることができたり、こんな生き方や恋愛を

してみたいと感じやすかったりすることが、この2つのドラマの面白さではないかと思う。次に、『私の頭の中の消しゴム』は、ストーリー性にとっても惹かれたからである。幸せっぱいの人生もつかの間、妻が若年性アルツハイマーと診断された夫婦はどうなっていくのかという、どこか現実性のある感情移入しやすいストーリーのため、日本で上映された韓国の興行映画のうち、歴代2位の記録を持つ映画なのではないかと考える。

また、OSTのレベルが高いと述べられていたが、それは私がK-POPアイドルを好きな理由に通じるものがある。そして、歌唱力やダンスの構成の上手さ・表情管理などのレベルが高いK-POPの文化が日本に浸透してきているのは、日本にとって有益であると感じる。一方で、韓国でも日本の食文化が話題になっているように、様々な分野で交流を行い、異文化を理解し認め合っていくことは、今後の世界をより良いものにしていくために必要な考え方であると考えます。

ちなみに、私は『恋のゴールドメダル』という胸キュン溢れる甘酸っぱい初恋を描いた韓国ドラマが今のところ1番好きです。先生がお勧めしていた作品の中の『梨泰院クラス』と『よくおごってくれる綺麗なお姉さん』に出演していたイ・ジュヨンが、主役の友人として出演しているので、ぜひ見てみてください！

V

VIII・韓国ドラマ、映画—私は韓国の食べ物やアイドルが好きでNetflixでもよく韓国ドラマを見るので、このテーマを選んだ。見るきっかけは出ている俳優でも、見ると、話の内容や他の女優、俳優さんにハマり、そのキャストが出ているドラマを見始め、終わりが見えないことがよくある。それほど韓国ドラマは面白くてずっと見てしまう。

私も「梨泰院クラス」を見たときとても面白くて見るペースが早く、長いのにすぐ見終わってしまった。私は恋愛要素多めの韓国ドラマをよく見るので、このような社会の下剋上のストーリーにハマったのは初めてだった。最後はイソと結ばれるが、個人的に私はスア推しだったので悲しい部分もあった。

何事にも全力で立ち向かったり、復讐をするためにどんなことでも挑戦したりするセロイを見てとても感動した。OSTも良いとおっしゃっていて、私はBTSのVが歌うSweet Nightがお気に入りです、聞くと心が落ち着く感じがする。

「梨泰院クラス」以外にも好きなドラマがあって、「わかっているよ」という大学生の恋愛を描いたドラマである。これもストーリーはもちろんOSTが最高だ。あんなにドラマに合うOSTは日本にはないと感じる程、韓国のドラマにハマっている。

W

X章日常生活の社会学、映画「天気の子」を観るということについて述べる。私も「天気の子」の映画を見た。素敵な映画だったと思う。しかし、やはり私はジブリの映画の方が好きだと感じた。教育、社会学的考察にも記載されている通り、ジブリ映画はいろいろな解釈

を考える必要がある。私はこの部分にとっても魅力を感じる。なぜなら映画の感想は人それぞれであり、共感する部分はもちろんあるがそれ以上に異なる部分もたくさんあると考えるからだ。映画の感想を他の誰かと共有すると新しい発見があったり、小学生の頃に見たときと大学生になってから見たときの感じ方が違ったり、そういった観る年齢や観る人によって感じる部分の違いに面白みを感じる。単純な映画は、何かを押し付けられた感じがするが、複雑な映画は作者の考えをプレゼンされ、それを踏まえて自分の考えを深めると言う点が素晴らしいと私は考える。幼い子供と年寄りが共に楽しめる映画と言うよりも年代によって様々な感じ方があり、それを共有する映画、共有できる映画、それで良いのではないかと私は思う。楽しい・面白い映画とつまらない・私はそうは思わないという映画、どちらも自分の価値観を深めてくれたり、視野や世界を広げてくれる材料だと考えた。

X

IX章「花紀行」、X章「定年後の生活」を熟読し、特にIX章冒頭の「日常性の危うさを感じる人が、草木や花といった自然に目が行く」という部分に私の祖母を思い浮かべた。私の祖母は、もう10年ほど一人暮らしで日常生活での会話や人とのコミュニケーションの機会は、滅多になくなっていて感じる。人と関わることが減ったためか、現在は庭で花や果物の栽培を多く行っている。私は年配の方が自然に興味を持つ理由について、年齢を重ねる事に感受性が高まり、自然の事物に興味を湧かため、ごく当たり前の事だと考えていたが、江藤淳さんの「日常性の危うさ」という観点からの意見を取り入れ、その通りだと考えた。私の祖母も祖父が活着ている時は、花や植物といった自然には興味がなく、祖父が亡くなり、日常性に危険を感じ始め人との関わりを埋める形で自然の事物に興味を持ったとすると納得がいく。次にX章、「定年後の生活、自分史」-4「老いによる思考力や表現力の衰えについて」を読んで、池上彰さんの自己分析力と判断力の高さに驚いた。本誌に記述されている、体力や体調の衰えは自身で気付くことができるが、知力や機能、語彙などの能力は他人からの指摘が必要というのが本当にその通りだと感じた。実際に、高齢者の事故などが代表に挙げられ、自身では気付かないような機能低下が事故に繋がっているケースが多くある。その為、自分自身を知るためにも人とのコミュニケーションは大切な鍵になってくると考えた。私自身の話になってしまうが、もっと沢山祖母と触れ合い関わることで、少しでも良い方向に進むのではないかと冊子を熟読し考えることができた。